

ネパール・トリブバン大学 CNAS との計量社会学セミナー（第4回） 報告

2010年10月21日 関西学院大学大学院社会学研究科大学院 GP 事務室

■ 1. セミナー開催の目的 ■

ネパール連邦民主共和国において、トリブバン大学 CNAS (Center for Nepal and Asian Study) と本大学院 GP プログラムとの共催で、計量社会学セミナーを開催した。なお、今回は、第4回目であり GP プログラムとして最終のセミナーとなる。本セミナーの目的はこれまでと同様、1) 統計処理ソフト R を使った分析方法をネパール側参加者に教授すること、2) 統計処理に関する知識を持つ本学側参加院生がセミナー講師となりセミナーを組み立て英語でレクチャーを行ったり、セミナー運営の補助を行う力を養うことである。

最終回となる今回は、参加者が自身の研究について報告する時間をもうけた。英語でプレゼンテーションやディスカッションを行う力を身につけるとともに、R をいかに自身の研究／分析に活用しうるかといった具体的課題に取り組んだ。

また、セミナー最終日には、トリブバン大学の Rector である Prof. Soorya Lal Amatya 氏らが会場を訪問され、本セミナーを総括し、今後の大学間交流の方向性について話し合いを行った。



写真1 セミナー終了後、ヒマラヤをバックに

■ 2. 日程と参加者 ■

○ 日程

2010年9月2日(木)～9月9日(木)

於 Hotel GREENWICH BILLAGE (ホテル グリニッジビレッジ)

○ 参加者

〈トリブバン大学〉

Rishu Shrestha	(Tribhuvan University, MC)
Risohani Shrestha	(Tribhuvan University, MC)
Sadixya Bista	(Tribhuvan University, MC)
Sajana Thapa	(Tribhuvan University, MA)
Mrigendra BAHADUR Karki	(Tribhuvan University, Lecturer)
Pitambar Bhandari	(Tribhuvan University, Lecturer)

〈関西学院大学〉

前村 奈央佳	(関西学院大学社会学研究科 研究員)
前田 豊	(関西学院大学社会学研究科 博士課程後期課程)
中川 和亮	(関西学院大学社会学研究科 博士課程後期課程)
仲 修平	(関西学院大学社会学研究科 博士課程前期課程)
葛西 映吏子	(関西学院大学社会学研究科 研究員、GPプログラムRA)
中川 千草	(関西学院大学社会学研究科 GPプログラムコーディネーター)
中野 康人准教授	(関西学院大学社会学部 教授)

○ スケジュール

9月2日(木) 関空集合

9月3日(金) 関空出発(00:30)、トリブバン空港到着(12:25)

9月4日(土) スタディー・ツアー(バクタプルおよびスワヤンブナート寺院)

9月5日(日) セミナー I(10:00-12:00) 地理情報と地図描画
セミナー II(14:00-16:00) 重回帰分析、班別の分析結果報告

9月6日(月)

セミナー III(10:00-12:00) 研究報告①

前田 豊(Comparative Reference Group as the Determinant of Class Identification)、
仲 修平(Changes of Japanese Youth Labor Market)

セミナーIV(14:00-16:00) 研究報告②

中川 和亮(The Relationship between Social happiness and Advertising)、
前村 奈央佳(Quantitative investigation of qualitative data: An introduction to KJ
method)

9月7日(火)

セミナー V (10:00-12:00) 研究報告③

Sadixya Bista (Homosexuals and life chances) 、

Risohani Shrestha (Changing Pattern of Family and condition of Elderly people) 、

Pitambar Bhandari (Student Mobilization in Politics Linkage between Political organization and Non-political organization)

セミナーIV(14:00-16:00) 研究報告④

Rishu Shrestha (Socio-economic Condition of women Living with HIV and AIDS in Nepal) 、

Mrigendra BAHADUR Karki (Activism in Nepal: A study on activist's motivation)

9月8日(水) トリブバン空港発 (13:30)

9月9日(木) 関空到着 (7:00)



写真2 セミナーの様子

■ 3. セミナー参加者によるコメント ■

● 仲 修平 (博士課程前期課程)

まず、今回初めて本セミナーに参加する機会を与えて頂いたことに感謝したい。参加に至る最大の動機は、ネパールという未知の国への関心と同じ社会学を学ぶ同年代の大学院生との学術的な交流ができるという大変貴重な機会に何とか自分も加わりたい、という思いが強かったということである。最終回のセミナーということもあり、これまで学んできた計量的な分析手法を用いて、各自の研究に関する英語での報告があるというのは私にとっては大きなハードルであった。この春から初めて統計/計量的なことを学び始めた自身の知識や経験の浅さを考えると、今回は一つの挑戦であった。参加希望に手を挙げることにためらいはあったが、自身を少しでも前に押し出してみようと思い参加に至った。

セミナーを振り返ってみると、現地での経験も大变得難しいものであったが、セミナーに向けた準備を通じて先生や院生との新たな交流をさせてもらったことが、私にとっては大きいものとなっている。

報告に関する方向性は中野先生、Rを用いた分析方法には前田さん、さらに英語の原稿については川端先生やテランスさんにご指導頂くという万全のサポートによって、無事報告を終えることができた。私の報告は、「若年労働市場の変化」というタイトルで、カテゴリカルな変数の分析の基礎であるクロス表の分析、残差による関連の解釈の仕方を実際に行った内容である。報告の狙いは、自身の関心である若年層の雇用の問題を示すことによってネパール大学院生とディスカッションをすること、第一回セミナーの内容にあたるクロス表の解釈を自分なりにRを用いて取り組むことであった。

前者については、報告後に多くのコメントをもらうことができ、ある程度達成できたように思う。しかし、後者についてはさらに知識を得て深めていかなければならないと強く感じている。今回は基礎の基礎であるクロス表の解釈に絞ったが、今後はログリニアモデルや質的比較分析などの習得に向けて取り組みたい。また、計量的な分析手法とともに、英語力の向上に努めたい。今回の報告を通じて語学力の必要性を痛感できたことは良かった。自分の頼りない英語で、何とか報告を乗り切れたことは少し自信になっているが、さらに英語力を身につけて次の機会に備えたい。

今回のセミナーを経ることによって、自身の修士論文に向けた研究では質的研究方法と量的研究方法を調和させながら取り組んでみたいと考え始めている。これまでは、質的方法を中心に考えていたが、量的方法とうまく組み合わせることによって研究対象をより深く捉えることができると考える。今後、計量的なアプローチをさらに学び、自身で集めたデータを分析/考察できるレベルまで高めていきたい。本セミナーに修士1年の段階で参加させて頂くことができ深く感謝している。

● 中川 和亮 (博士課程後期課程)

私は、ネパール計量社会学セミナーへは 2 回目の参加であり、今回も貴重な経験をさせていただいた。ひとつは、自身の研究報告の方法に関してである。会社員時代を含めパワーポイントを使用して報告をしたことがなかったので、今回発表するにあたり、事前に報告スライドを作成し、かつ英語での発表ということでプレッシャーを感じた。かなり反省すべき点があったものの、経験したことが今後研究を続けていくうえで貴重なものとなったと考えている。ひとつ壁を越えたと感じた。反省すべき主な点としては、私の報告は日本の現状のみの分析であり、ネパールの社会状況をある程度把握した上で臨めばよかったという点である。

今回の発表では、企業の社会的責任(CSR: Corporate Social Responsibility)を取り上げたのだが、言葉は知っているにしても生活感覚として理解するのが困難な「企業の視点」からのものだったため、そのあたりの説明があればより理解が深まっただろうと思う。

日本にいれば見過ごしがちだが、やはり世界は広いというのをあらためて実感した。カトマンズでは、街を歩いていると、人びとの活気ある表情ややりとり、建築途中の建物や道が多数あり、生活の力を感じた。

私は、研究において「社会の幸福」という視点で試行錯誤しており、ネパールの人びとにとっての幸福とは何か、ということ CNAS のカルキ氏に質問した。彼の返答としては、第一に家族と過ごすことであり、そして TV などからの先進国の情報によって野心や希望を持つことだということであった。私にとっては研究テーマを推進していく上で有り難い言葉であり、日本で議論するだけでは出てこなかった発言だろうと感じた。

最終日ネパールの街中の雑貨店でチャイを飲んだ。親子で協力して働いていて、支払いの時、英語を学校で勉強しているからと小学生低学年と思われる息子がでてきて対応してくれた。親子のやりとりや表情を観察していて、大変すがすがしい気持ちになった。

ネパールの学生達との会話で、彼らが英語でスムーズに政治的なことなどをテーマとして議論できることが驚きであった。国際舞台ではやはり共通語である英語を駆使しなければ、伝えたいことが明確に伝えられないのがゆきを感じた。帰国後は英語の必要性を痛感し、英語力のブラッシュアップに努めている。それと忘れてならないのはカルキ氏はじめ、ネパールの素晴らしい方々との交流である。一緒にまち歩きや会食ができていい思い出となった。又、彼らの発表も、政治、ジェンダー、学生運動、エイズ、などのテーマで興味深く拝聴させていただいた。しかも全く原稿を見ないで発表する学生たちに感服させられた。日本及びネパールの学生の発表を通じてあらためて感じたのは、統計を活用するテーマは多岐にわたっているということである。私自身統計の知識や活用はまだ未熟だが、今後研究テーマを推進していく上で必要なものであり、精進していきたいと思っている。

最後にこのような機会を与えていただきコーディネートしていただいた関西学院大学 GP 及びトリブバン大学 CNAS の関係者の方々に感謝したい。

● 前田 豊 (博士課程後期課程)

統計手法および R での実践方法のレクチャーが主眼であったこれまでのセミナーとは異なり、4 回目を迎えた今回の計量社会学セミナーでは、日本・ネパール側の参加者による研究報告がプログラムのメインに据えられていた。これまでよりも学術的な国際交流の色合いが強い今回のセミナーに参加したことで、国際発信の難しさを理解することができた。この点をセミナーレポートとして記しておきたい。

セミナーでは「階層帰属意識」と呼ばれる社会的意識を取り上げ、その規定メカニズムに関する報告を行った。階層帰属意識とは個人が認識している自己の階層的地位を指す概念で、「不平等な社会的資源の配分状況」として定義される多元的社会階層のなか、個人がどのように自身の保有資源量を評価しているのかを表す指標として理論的に捉えることができる。これまでの実証的先行研究が明らかにしてきたことは、収入や職業威信などの客観的階層次元上の地位が帰属意識のあり方がある程度規定しているものの、それだけでは十分に説明されえない部分が依然として多く存在するという事実であった。それゆえ、階層帰属意識の規定メカニズムを問うことは、単純な客観的条件の反射として捉えられない個人の意識構造を問うことに他ならず、例えば格差意識や公正観などの他の階層意識を考える際の基礎的な研究として社会的／学術的意義を持つと考えられる。

これまでも、報告者は学内・外で階層帰属意識に関する報告を行ってきたが、報告者が所属する数理／計量社会学の領域では、すでに階層帰属意識の社会的／学術的な研究意義が十分に浸透していた。また『下流社会』や『格差社会』など現代日本の階層・階級構造を扱う書籍がベストセラーとなったこともあって、社会階層が現代社会を見るひとつの視点としてひろく膾炙しつつあることから、報告に際して改めて階層帰属意識を扱う社会的／学術的意義を詳細に述べる必要性を感じることはなかった。しかし、今回のセミナーのように、それぞれの参加者が異なる専門領域に属し、さらに同じ文化的背景を共有していない状況で報告を行うとなると、報告者と聴衆間の事前の共通知識／理解に頼らない形で研究の社会的／学術的意義を説明する必要がある。

今回セミナーに参加してこの問題に直面できたことは、これまで日本で同じ研究領域に属している聴衆を対象にして行ってきた研究報告が、どれだけ暗黙の共通知識／理解に依存していたのかを内省する絶好の機会となった。そして、それらに依存しない研究発信の困難さを理解する機会ともなった。おそらく、この問題は国際的に研究成果を発信するときに決して避けては通れぬ問題の 1 つであろう。この意味で今回のセミナーでの経験は今後の研究生活を送るにあたり、示唆に富む教訓をもたらしてくれた。

● 前村 奈央佳(研究科研究員)

研究者が用意した変数は、ある現象の何パーセントを説明しているのか。今回のセミナーでは主として、Rで重回帰分析を行う方法を教わった。私にとっては初めてのセミナー参加であったが、残念ながら今回が最終回となる。これまで参加を躊躇っていたわけではなかったのだが、恐らく「英語の壁」や「計量に関する知識の壁」が存在していて、回帰分析的に言えば、これらの変数が「セミナーへの参加動機」を阻害していたのかもしれない。しかし、いったんこれらの壁を無視してセミナーに参加すれば、英語も計量も道具に過ぎず、それほど説明力を持つものではないような気がしてきた。私自身の研究では、その些細な「道具」の有無が人の行動を促進したり抑制したりすることを検討しているのだが、参加者たちが英語を共通言語とし、統計学、計量的な知識を共有することで、国や文化、あるいは学問分野の違いを超えた共通の土台で議論することが可能になる。その共通の場を持つ機会を有することじたいが重要なだろう。

また、初めて訪れたネパールという国について感じたことを述べておきたい。文化について考えようとするとき、複数の文化を比較し、どこが異なるかといった観点で論じられることが多い。たとえば最近の文化心理学では、分析的思考の西洋人—包括的思考の東洋人、といった認知様式の文化差を検証する研究が注目を集めている。ネパールと日本を比べてみても、国の成り立ち、政治、制度、民族、言語、宗教など両国の歴史や文化的な違いを挙げればキリがないだろう。しかし一方で、個人のレベルでは、ある複数の文化のもと、どんな側面を相違点あるいは類似点と認識するかは、かなり主観的で場依存的な問題であることがわかっている。ここでは敢えて、私がネパールで感じたネパールと日本の「類似点」や「共通点」について記しておきたい。

まず、ネパール人と日本人は、プレゼンテーションの仕方が似ている。私はこれまで何度か国際会議などで、欧米人による「素晴らしい」プレゼンテーションに出会った。彼らはまず声が大きく、自信に満ちていて、ユーモラスで、断定的である。研究における **limitation** にはほとんど言及せず、いかにその研究が素晴らしいかがアピールされる。国際会議で発表する際、私ももっと堂々としなければ、と思っはいるものの、やはり普段し慣れない振る舞いをするのは大きなストレスを感じる。その点、ネパールの参加者の発表スタイルは、自分の研究に関する謙遜、恥らう仕草、聴衆に対する感謝や謝罪の言葉が大いに含まれていて、親しみを感じるところがあった。また、目上の人との接し方も似ている。国によっては上司や先生をファーストネームで呼ぶ習慣があり、外国人の先生から “Call me, (ファーストネーム)” といわれて抵抗を感じた経験のある日本人は少ないだろう。ネパールにも「先生」に対応する敬称があるらしく、目上の人をファーストネームで呼ぶようなことは失礼で、考えられないという。このように、人との接し方において、日本人のそれとも共通する「控えめさ」のようなものを感じた。いずれのスタイルがよいかということとは別にして、「控えめさ」を共有する者同士のコミュニケーションは、ある種の心地よさがあった。そのほかにも、カジュアルな会話の中で笑いの起こるポイント、

女の子の日焼け対策、山が身近に見える風景など、ネパールと日本は多くのものを共有しているように感じた。

今回のセミナーで私は、川喜田二郎が開発した **KJ** 法を用いた研究について発表をした。テーマを決めてからわかったことなのだが、偶然にも、川喜田氏が **KJ** 法の着想を得たのはネパールの地だという。これまで縁がないと思われていた場所を訪れ、その研究者たちと計量や社会学という共通の土台で議論し、その土地の人々の振る舞いに自分と共有する部分を感じたことは、偶然ではないのかもしれない。たとえば「東洋―西洋」の比較だけで、ある社会現象の果たして何パーセントが説明できるのか。これまで全く想定してこなかった重要な変数が他にもあるのではないか。今回の経験から、研究する場所や「○○学」という学問領域に固執せず、視野を広げる必要性を感じさせられた。非科学的な発想だが、ネパールという土地にはそんな力があつた。

● 葛西 映史子(大学院研究員、GP プログラム RA)

全 4 回を終了し、本セミナーのコーディネイト役として、うまくいった点と難しかった点をあげておきたい。

まずは、大学院生にたいし、英語を使って講義を受けたり、また講義を担当するという機会を継続して提供できた点である。そのための事前勉強会の実施や英語サポートも事務室の協力のもと提供することができた点は評価できる。日本とはかなり異なる社会的背景を持つネパールという国の学生たちとともに机を並べ、ともに課題に取り組み、議論するという機会は、参加者自身の調査研究にとっても大変大きな刺激となったであろう。セミナーの 4 回目に互いの研究内容を報告しあい、理解を深め、いかに R という分析手法を有効活用することができるのかを具体的に検討する機会が持てたことも良かったと思う。また、統計処理ソフトがかなりの高額であるところを考えると、その購入・使用が難しい、ネパールという国において、フリーソフトである R を大学院生に教授していただくことは、ネパール人院生にとっても非常に有意義な機会を提供することとなったと思われる。本セミナーを通して、これまで、量的調査／分析が十分に用いられてこなかったネパールの社会学／人類学領域において、研究者たちのモチベーションを引き上げることとなったはずである。

一方、難しかった点としては、参加院生が集まりづらかった点があげられる。夏休みや春休み期間にセミナーを実施したため、夏期集中講義や学会、個人調査などの時期と重なり、参加を断念した院生も少なからずいた。これは関学側に限らず、トリブバン大学側の参加者からも、大学の正規の授業や試験との調整が難しかったとの声を聞いた。この点については、両大学ともに、セミナーへの参加を正規授業の履修単位とするなど、大学院と GP プログラムとの連携が必要であったのかもしれない。

セミナーの共催校であるトリブバン大学側からは、ぜひ R の講義を続けてほしいとの要請があった。このプログラムをきっかけとして、両校の提携が進むことを期待したい。

● 中野 康人 (関西学院大学社会学部 教授)

2009年3月からはじまったこのセミナーもこれで4回目となる。今回のセミナーでは、最終回ということ意識して、これまで取り上げてこなかった分析手法の紹介に努めるとともに、セミナーの総仕上げとして参加者各自の研究報告会を行うこととした。前者については、(1)地理情報を含んだデータの活用と地図描画、(2)多変量解析のもっとも基礎的な手法の一つである重回帰分析、を紹介した。後者については、参加者各自の研究について、計量的な成果やこれからの計画について報告し、一連のセミナーで学んだ手法の適用可能性を確認することを目的とした。

各時間の概要は次のとおりである。

地理情報と地図描画：地理情報を含んだデータは、デュルケム『自殺論』の時代から社会的分析に欠かせないものであったが、昨今の GIS 環境の整備に伴って急速にその利用可能性が高まっている。自治体毎に集計されたデータを地図として可視化したグラフ (choropleth 図) を作成するだけでも、単なる数表だけでは得られない解釈の幅が出てくる。今回のセミナーでは、R 上で利用できる GIS 関連パッケージの解説をしたあとに、ネパールの 75 の district に関する統計データ (人口、平均余命、宗教、HDI、就学率など) を地図化する演習を行った。地図描画の基礎となる shapefile 自体はインターネット上で配布されているものが多く、該当する地域のデータがあれば、研究者各自が収集した変数を地図上に容易に可視化できることが確認できた。

重回帰分析：重回帰分析は、多変量解析を学ぶ者が最初に通過する関門の一つである。しかし、本セミナーではこれまでこの分析手法を取り上げずにきた。参加者の多くが質的な研究をベースにしているという事情を鑑みて、カテゴリカルな変数を分析する手法を中心に話をすすめてきたからである。今回は最後のセミナーということもあり、また、数回のセミナーを通じて参加者の統計手法に関する知識も深まっていることが期待されたので、連続変数を被説明変数にすえたこの手法を紹介した。演習では、地理情報データの分析でも用いたネパールの 75 district の統計を用いて、平均余命や HDI を説明する分析を試みた。短い時間の中で、ごく基礎的な部分の解説・演習しかできなかったが、偶然にもネパール側参加者に平均余命を研究の対象とすることを企図しているものがいた。また、日本側参加者の研究発表でも重回帰分析を利用した階層帰属意識の分析が紹介されたので、このタイミングで重回帰分析を紹介できたのは時宜を得たものであったと思う。

各参加者の研究発表：詳細はそれぞれの報告に委ねて、概要とその感想を述べる。参加者は、修士一年の者から博士課程を既に終了している者までいて、研究の進捗状況も様々

であった。また研究関心も、若年労働市場、広告と幸福、階層帰属意識、質的データのコーディング、トランスジェンダー、家族形態と高齢者、学生運動、HIV/AIDS 感染者など、多岐に渡っていた。計量的な研究手法に基づいてすでに成果を出している日本側参加者もいたが、多くの参加者はこれまで質的な調査研究に携わってきた者たちであった。しかしながら、今回の研究報告では、各自の研究上の問いに対して計量的にアプローチしていく意志と努力が垣間みられた。最終日には、CNAS のスタッフや TU の幹部の方々も陪席していただき、活発で有意義な討論がかわされた。

最後に、このセミナー全体を振り返っておく。計量社会学的な理論と方法を受講生各自の研究関心にもとづいて涵養すること。これがこのセミナーの主な目的の 1 つであった。最後の研究発表の成果を見る限りでは、この目的は一定程度達成されたものと思量される。この 1 年半の間に、セミナーに触発される形で量的な調査計画をたてる者がでてきたし、第 1 回目のセミナーでは、参加者の多くは R の命令文を打ち込むことにも四苦八苦してなかなか前に進めなかったが、今回は簡単な説明のみですぐに R を使った演習の作業が始められようにまでなっていた。本セミナーにおいては、質的研究にベースをおいた初学者を想定して、手元にあるデータで比較的容易に利用できる分析手法をまずは紹介していく、という形ですすめていった。以下は、4 回のセミナーで取り扱った主なトピックである。

quality or quantity
sociological research problem and its quantification
statistics in sociology (cross tabulation, mosaicplot)
correspondence analysis
quantitative text analysis
how to make a dataset from questionnaires
inference from sample data
test of independence
loglinear analysis
qualitative comparative analysis (QCA)
GIS, map drawing
regression analysis

今後、各自が自立的に計量分析を行っていくには、統計学を基礎から体系的に学習し、多変量解析の種類や用途を概観して、自分がやりたい研究にどのような手法が適用できるのか判断できるようになっていく必要がある。そういう意味では、このセミナーは社会学における計量的なデータ分析の種を蒔く段階でおわっており、如何にそれを育てて結実させるかは、今後の教育体制ならびに参加者各自の努力にかかっているといえる。

このセミナーのもう 1 つの目的は、大学院生が国際的な環境に身を置き、英語を使用し

た発表や討論の経験を積むことであった。今回参加した4名のうち、2名は以前からの経験者、2名は初めての参加であった。継続参加の者は、回を追う毎に英語でのコミュニケーションがスムーズになってきた。また、初参加の者も、非常にスムーズに発表をこなし、ネパール側参加者と討論することができていた。ネパール側の大学院生の案内でパタンの街をエクスカージョンしたり、インフォーマルなディナーで交歓会が催される等、大学院生の国際交流も和やかな雰囲気の中で行うことができた。

これでGPプログラムによるセミナーは終了となるが、のべ20名弱の参加者が今後の研究・社会活動の中でこの経験を活かした成果を出してくれることを期待する。

以上